



Title	＜書評＞W. メッツィヒ著 「西洋の紋章」 : heraldry for the designer
Author(s)	渡辺, 真
Citation	デザイン理論. 1971, 10, p. 102-103
Version Type	VoR
URL	<a href="https://doi.org/10.18910/53715">https://doi.org/10.18910/53715</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

W. メッツィヒ著、中村敬治訳 美術出版社

## 「西 洋 の 紋 章」

—heraldry for the designer—

西洋の古い文献や文化財あるいは馬車などに、ふと紋章がつけられていることに気づくことがある。又、現代でも、洋酒のビンや外車の標章さらにはパッケージや包装紙に装飾として使われた紋章を目にすることがある。私達日本人にとって、それはなんとなく西洋の古い文化の雰囲気を感じさせてくれるものである。しかしそこには紋章学という学問があり、種々の規則が定められているということを知っている人は少ないのではないかと思う。特に西洋の紋章には、日本の家紋以上に精密な体系的規則が定められているというところである。たとえば正式の紋章においては、12世紀当時の封建騎士の戦闘時の服装からきた、「かぶと飾り」、「渦形」、「バッジ」、「ヘルメット」、「盾」、「マント」、「盾持ち」、「巻物と銘句」などの構成要素が定められていたり、紋章の記述法やその手順などに関しても種々の規則が定められている。一つの紋章の背後には、単にそれが誰々の紋章であるというだけでなく、私達が考えもしないような世界が形成されているのである。

この著書においては、このような種々の規則が理解しやすく説明されており、その他紋章の発生の理由あるいは長い歴史の中でどのような紋がつくられたかという図例がかなり豊富にとりあげられている。さらに著者自身が実際に会社や友人のために工夫した紋章も載せられており、その際の考え方などが興味深く説明されている。しかし紋章学といった堅苦しさはなく、誰でもが興味深く読めるように工夫された本である。それは西洋の文化の一つを知る上でも貴重なものであり、この点今までこのような本が日本に紹介されていなかっただけに有意義なものである。

ところで、この著者は、「私はこの本によってデザイナーたちに紋章デザインへの手がかりを用意したいと思った」、又、「原則的に、私は紋章デザインの厳密な『規則』は、こういうデザインを効果的なものにするには必要であると思うので、重視した」と述べており、彼は種々の体系的な規則が創造の障害となるのではなく、むしろいっそう自由な創造力を発揮させるものであると考えている。つまり彼の意図は、単に応用しうる過去の紋章の紹介ではなく、その背後にある規則のもつ意味の解明であつたと思われる。しかし日本において紋章をデザインしようとする場合多少問題がある。なぜなら、一般に規則という

ものは、よく知られている必要があり、さらにそれを支える社会的背景を必要とする。それ故日本と西洋とはその社会的背景を異にしており、西洋の紋章の規則が直接的に意味をもつとはいえないのである。さらに日本においても家紋というものがあるからである。

とはいえ、西洋の紋章には、日本の家紋には見られない特徴がある。それは、単に規則が定められているというだけでなく、それが構成要素として紋章の中に表示されているということである。この特徴の意味することは、ある図象が、その置かれた場所やそれを見る人によって紋章であると判断されるだけでなく、図象自体が紋章であることを表示しているということである。このことが紋章のデザインに影響することは、西洋と日本の紋章を比較すれば明らかとなるであろう。日本の家紋においては、一定の構成要素をもたないので、それが家紋として判別されるためには、家紋自体のより形象的な統一感が必要とされる。それ故一般にその図形の具象の意味が希薄になり、抽象化の傾向が強い。それに対し西洋の紋章では、わく組が定められているので、図形はかなり自由に描かれ、その具象の意味もより明白である。つまり図形がその具象の意味を語ることが可能となっているのである。さらにこの「語る」ということに関して、重要なことがある。一般になにかを語る場合、その主語が明らかにされねばならない。西洋の紋章においては、かの構成要素が封建騎士の姿を形どるところに、種々の図形が語るべき対象が明示されているのである。言い換れば、そこにおいては、種々の図形の意味の理解の方向が明確に視覚化されているといえるのである。一般に、言語であろうと、視覚的な記号であろうと、その意味が的確に伝達されることを期待する場合、意味の理解の方向を記号自身がつくことは、一つの重要な条件であると言える。

ところで西洋の紋章に見られる種々の紋の意味は、その純粋な造形的意味というよりは、一般に定着した経験的あるいはいわゆる文学の意味であるといえる。それに対し現代特に20世紀以後抽象美術が現われてからは、問われるのは、純粋な造形的意味すなわち造形性そのものであるといわれる。しかしこのことは、理解の方向性の表示ということを否定するものではない。図形の意味が純粋であればある程、逆にこのような契機が必要とされるのである。デザイナーの目的は、単なる自己表現ではなく、より積極的な社会的意味の伝達である。それ故表現されたものが、積極的に伝達され、了解されるように意図しなければならない。現代のように複雑化し、多元化した時代においては、意味の明解な伝達は非常に困難であると言える。それだからこそ、逆にそれに対して積極的に働きかける必要があるのである。

以上私が西洋の紋章から学んだことであるが、この他、単に取り上げられた図形の応用を考えるだけでなく、さらに深く学ぶべきことがあるであろう。

京都工芸繊維大学大学院 渡辺 真